『國民新報』1940年5月12日

[主張]　子供と青年[[1]](#footnote-1)

　『をにしませう』といふの[で]のをにのとづけたのでした。そののは にぎたのでありますが、しかしわれわれは年すべてのをのとてゐなければなりませぬ。はのであり、びであり、であり、であるからであります。われわれのすべてのやきは、からへば、すべてのためになされるものとふべきであります。われわれがなやをりげやうとして一にしてゐるのも、われわれのに、もつともつと なをさせやうといふことになりませぬ。

　かつてヨーロッパでは のといふことばがしたことがあります。それは をにすることにめたといふことで あります。それから はをにする色々ながつて 日にんでゐるのであります。の、の、のみ、の、の、の娯楽といふに、の では、を夫にし、かしこくし、しくするための くのしいがたし、また、大人々がを にするととを つやうになつたのであります。をてるにも の、のためのをり、にものための のをるといふやうなわけで、といふのがののとなつたので あります。

　ところがわがはどうでせう。五百萬のはげられてゐるのであります。にいて、がやかされてゐることにかけては、をぎるほどかもれませぬが、にされることからへば、てんで おにならないのであります。一のでは、のといふものが ありませぬ。はのであります。へつてはからめされ、へつてはからされるといふに ちくがないので あります。二にはのためのおといふものが ありませぬ。のべるものを　ちよつぴりつて くでありまして、のややがみられてりませぬ。しからばはどうかとふに、や やもんどのためのものでありまして、同のんびりめるところが いのであります。それのみならず、などではやバスなどの でも、のあるにしけられ、ひやられるといつたで あるし、また、はににするとか、くとかいふ かはりに、ふのでなければ、したりかしたりするので、かられば、のはに 四、るところ荊棘のなので あります。これでは、こんなにげられてはがに、に、にたうはずがありませぬ。

　年。もかくげられた をもつたのですね。こそきおさまや おさまになつて、いやたちのもしいになつてげませう。

1. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-1)